

猫咬傷で重症熱性血小板減少症候群（SFTS）を発症

厚生労働省は7月24日、西日本の50代女性が昨年、野良猫にかまれた後にマダニが媒介するウイルス感染症「重症熱性血小板減少症候群（SFTS）」を発症し、死亡していたことが分かったと発表しました（共同通信社）。

哺乳類から感染したとみられる世界初のケースとしています。今年に入ってペットのイヌやネコのSFTSの発症も1例ずつ確認されました。厚労省は、動物の感染はまれで、屋内で飼っているネコにはリスクはないとしています。屋外にいる体調不良のペットに接触する場合は注意するよう呼び掛けています。

SFTSはウイルスによる感染症で、マダニにかまれてうつります。

6日から2週間ほどの潜伏期間を経て、発熱や全身のだるさ、吐き気などの症状がでます。重症化し死亡することもあり、致死率は6～30%とされています。国内ではこれまで、西日本を中心に266人の患者が報告され、うち57人が死亡しています。

有効な治療薬がないため感染予防しか方法がありません。これまでSFTSは森林や草地に生息するマダニに人が直接かまれることのみで感染すると考えられていました。したがって動物咬傷で感染した今回の事例は極めて大きな問題といえます。

厚労省は体調不良の動物と接する際には、手袋などの感染予防措置を講じるよう、日本獣医師会などに通知し、ネコの飼い主には、ダニ駆除剤を投与したり、体調不良の際に動物病院を受診したりすることを勧めています。

SFTSは中国の江蘇省における疫学調査で、ヤギ、ウシ、イヌ、ブタ、ニワトリの血清から抗SFTSV抗体が検出されており、これらの動物に感染既往があることが報告されています。しかし感染しても恐らく動物は発症しないと考えられています¹⁾。ただ、これらの感染動物と人への感染経路へは不明でした。しかし、SFTSは中国では、ヒト→ヒト感染例が数事例報告されています。患者の血液や体液との接触は注意が必要で、最終的に亡くなった患者を診察、治療した医師、家族、納棺師など数名が二次感染をした事例もあります。そうすると、無症状のウイルス保有動物からの感染も当然可能性としてはあると思われます。また近年の研究では中国のヤギの抗体陽性率は67%~95%とかなり高く、日本でも北海道を除く国内の広い範囲でシカ、イノシシ、アライグマなどの野生動物だけでなく飼育犬にも抗体陽性動物が確認されています。日本ではシカの陽性率が比較的高くSFTS患者発生地域で陽性率がより高い傾向がみられています。またウイルスを媒介するダニも動物から吸血することで動物からダニへウイルスが移動することもわかってきました²⁾。

中国の研究では流行地の健常の人の5%に抗体保有者が存在しており、このウイルスは本来動物に感染するウイルスで人には感染しにくく、一旦感染し発症すると重篤化するのではないかと考える研究者もいます³⁾。いずれにしても、SFTSウイルスはダニを介して一般動物の中で濃厚な生活環を形成していることが疑われます。

これらのダニは動物から吸血することのみで生息しているため、ダニに人が刺された場合、そのダニは確実に他の動物にも吸血していることになり、近年、野生動物のSFTSウ

ウイルス保有率が上昇していることより、私たちの周囲には間違いなく SFTS ウイルスが増えていると考えるべきです。また、野生動物が人里に下りてきて問題になっていますが、これらは山奥のダニを人里に持ってくる弊害も合わせもっています。

さて野生動物が SFTS ウイルスに感染既往が多いのは事実ですが、飼育動物はどうでしょうか？前田の飼育犬の検討⁴⁾では 136 頭中 5 頭 (3.7%) が抗体陽性で、2 頭(1.5%)に血液から SFTS ウイルスが検出されました。ちなみにこれらの犬は無症状でした。

前田は、1) 犬の散歩道には SFTSV 保有ダニが存在していること、2) 犬によって SFTSV 保有ダニが住宅地に運ばれている可能性があること、3) 犬だけではなく猫でも同様のことが考えられること、4) 犬や猫に対するダニの忌避剤を獣医師によって投与することを強く勧めること、5) ついたダニを取るときは、SFTSV を保有している可能性があるので潰してはいけないこと、を考察しています。

いずれにしろ SFTS ウイルスは私たちのすぐ近くまで忍び寄ってきていることを肝に銘じるべきです。

平成 29 年 8 月 1 日

参考文献

- 1) 岸本 寿男ら：我が国におけるダニ媒介性感染症の多様性．日内学誌 2015；104；2011－2019．
- 2) 高橋 徹：重症熱性血小板減少症候群 (SFTS) と SFTS ウイルス．ウイルス 2015；65；7－16．
- 3) 森川 茂：重症熱性血小板減少症候群．獣医学誌 2013；2；142－143．
- 4) 前田 健：重症熱性血小板減少症候群 (SFTS) をはじめとするマダニ媒介性感染症の現状．学術の動向 2016；3；67－71．